

永日椅座

昨春以来、つれあいが一寸面倒な病気を背負い込んだので、専門医のいる静岡の病院での診察に何度か同道するこ
とになった。

そのたびに待たされる。

だいたいが予約ということになっているので、大抵その時刻の三十分ほど前には行って受付を済ませるのだが、さあそれからが永い。名前を呼ばれるまで二時間ぐらいは当たり前前で、先番に話の面倒な（とこちらは推察しているのだが）患者に当たろうもろなら、これはもう際限がない。

初診の時はまた特別で、指定が午前十一時半だったので、紹介状やら病理標本、画像その他一式取り揃えて鎌倉を七時半出発、途中三回の乗り換えもつつがなく、定刻には待合室に控えていた。診察が終わったら昼飯にしようなどをつれあいと話しながらのんびり構えていたらとんでもない、やっと順番が来て診察室に呼ばれたのが午後四時。仔細に診て貰い、資料を検討して貰って先生との話がすっかり終わったのが五時半だった。

元来、人並み以上にせっかちなのによく辛抱したと思うけれど、それというのも診てくれる先生の方も昼食抜きで頑張っている様子が、待合室の椅子に座っていてもよく判るからであった。

連れ合いと一緒に入室して見ると、診察の入念なのは勿論、説明にもたつぷり時間をかけて、待合室にあと何人待っていてようが気にせず、とりあえず眼前の病人に集中して悠揚迫らず順に処理して行く姿勢に、別に「頑張っている」ところもなくこれが日常茶飯のここのようで何の気負いも無い。全国ブランドの専門医であり七百床の総合病院の院長でもある先生が多忙でない筈はないのに、他のことはすべて雑用に過ぎず、診察にかける時間ならいくらでもあるという顔で相手をしてくれると、朝からの永い待ち時間も帳消しになってしまう。三時間待ちで三分診察の弊がいわれて久しいけれども、問題は診療の時間の短かさにあるのではなくて、その内容の貧しさにあることが骨身に沁みてよく判った。

待たされるのにも理由があることが患者の方に了解され、それを補償する的確な対応があれば何の不満も残らな

い。

年は取りたくないもので翌日、首筋から腰までコチコチにこわばってロクに動けなくなったばかりか、おまけに熱まで出たけれど、この先生の外来診療の姿勢への尊敬の念は変わらない。

つれあいの手術の時も待った。

手術室の硝子扉まで見送ったのが午前九時、切除した腫瘍塊四片を見せられて説明して貰ったのが午後九時、挿管されたまま手術室から回復室へ運ばれるのを遠方から目撃した娘婿が興奮して「終わったらしい」と伝えてくれたのが午後十時、深夜灯だけになった薄暗い回復室に呼ばれて包帯の塊と化したつれあいに対面したのが午後十一時であった。

永い一日だった筈なのに、十五時間は優にかかる予定の手術だと以前から聞かされて覚悟が出来ていたからか、この日はむしろ時間が速く経ったような気さえする。

病院の八階にある控室の窓から見える初秋の天を流れる

雲、蒼空の光の変化を文字通り一日中眺めて過ごしながら、
こういう風に思いつきり贅沢に時間を費やすのは初めての
ことだし、多分これからも二度はあるまいと思っていた。
これがもし回復、全治の希望の少ない手術で、その終わる
のを待っているのであったら、この永い時間を贅沢と感ず
る余裕は無かったに違いない。さしあたり異様に速くなっ
ていたこの頃の時間の流れからちよつと外れて、終日茫然
として過ごしていることがとて贅沢と思われたのも、つれ
あいを業病から引き戻すには絶対に必要な時間だから、
手術時間が長ければ長いほど意味があるような気がしてい
たのである。

つれあいが退院し外来通院になってから、月に一、二度
静岡日赤病院頭頸部外科にお供する。初回に度肝を抜かれ
て以来すっかり慣れたのと、茫然として過ごす時間がむし
ろ貴重なことが解っているので二、三時間の待ち時間は苦
にならない。人前で居眠りが出来ない性質なので時々足踏
みをしながら時間をネタにして「哲学」して過ごす。

このところ年々、時の流れが速くなっている、なぜか。

自分の時間の在りようとか時間の密度を変えたのは、自分の暮らし方の変化そのものであって、私が単純にトシを取って惚けたせいではない。暮らし方が変化せざるを得なかったのは、自分の時間の多くの部分が要りもしない「情報」に埋め尽くされて、大事な空白、カラッポの部分が無くなってしまったからである。

ところで「時間」とは何だろうと気になるので岩波思想哲学事典を見たら「空間と並び、事物が縁起する基本的枠組みをすえる概念」とある。そこで「空間」の項を見たら「時間とともにそこでものごとが生起する基本形式」とある。ニュートン以来の絶対時間であり絶対空間の概念である。苦心の程はわかるけれど、実は何をいつているのか判らない。

アリストテレス以来「時間」を論じた「哲学」は山のようにあるらしい。(らしい・・・というのは私自身真剣に古典を勉強したことはないので実は無知だけれど)。

しかし二〇世紀の物理学の相対論、量子論では時間と空間は互いに変換可能なものであって、時間だけを論じても

意味が無いことになった筈なのに、真の意味での物理学が
らの「時空論」はまだ現れていない。待合室哲学は進歩が、
まだ、ない。

（ 神庫 二〇〇五年三月 ）